

2020年度 ソニー幼児教育支援プログラム

「科学する心を育てる」

～豊かな感性と創造性の芽生えを育む～

『風をつかまえた！』



岡山幼保連携型認定こども園

目 次

1.	はじめに	p 1
2.	「科学する心」についての考え方と取り組みのテーマ	p 1
3.	実践報告	
	事例1 「風はどっちから吹いてる？」	
	1－1 「タンポポの綿毛が…」	p 3
	1－2 「鯉のぼりの影踏み」	p 4
	1－3 「風はどっちから吹いてる？」	p 5
	1－4 「調べてみようよ！」	p 5
	1－5 「あれ？回らない…」	p 6
	1－6 「今度こそ！」	p 10
	1－7 「私もやりたい！」	p 12
	事例2 「風をつかまえた！」	
	2－1 「風をつかまえた！」	p 13
	2－2 「風の力ってすごい！」	p 16
4.	総合考察	p 19
5.	考察に基づく課題と今後の方向性と計画	p 19

1・はじめに

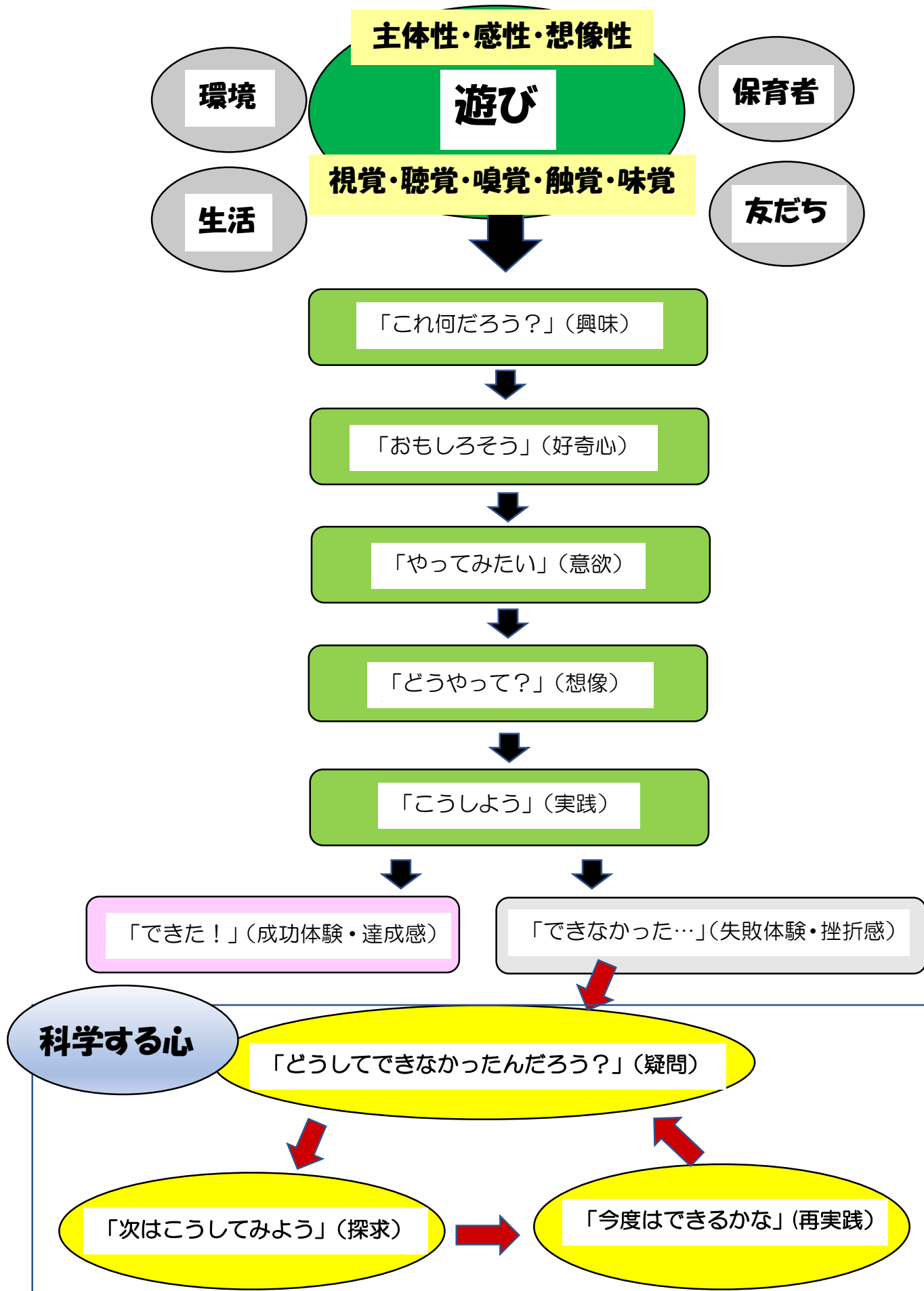
本園は幼保連携型認定こども園に移行して5年目を迎えた。敷地内には天然芝の広い園庭やビオトープ、元気ファーム(農園)があり、園舎の周りには田んぼや畑が広がっているという自然豊かな環境の中で、0歳から5歳までの子ども達が、毎日思いきり遊びを楽しんでいる。

私たちは「可能性ぐんぐん」という教育・保育理念の下、一人ひとり違う個性を持った子ども達が、日々の生活の中で何を見て、何を感じ、何に興味を持っているのかを大切にし、子ども達の未知なる可能性を引き出し、持っている力を伸ばしていくための教育・保育を目指している。

2. 「科学する心」についての考え方と取り組みのテーマ

子ども達は、毎日の生活の中で、たくさんの「これ何だろう?」に出会う。自然の中で発見するものや、友だちとのやり取りの中で感じる事など、本当に様々である。その「何だろう」という興味・関心がやがて「おもしろそう」という好奇心に変わり、そこから「やってみたい」「やろうよ」という意欲や挑戦に繋がる。そして実際に行動するために「どうやってしようか」と想像を膨らませて方法を考える。その後実際に行動し、「できた」という成功体験・達成感と「できなかった」という失敗体験と挫折感を味わう。大切なのはその「失敗」である。失敗することで、「じゃあどうしてできなかったのか」という疑問を持ち、その理由を探究していくと、子ども達は自分の考えを更に深めることができる。その失敗→探究→再実践のサイクルを繰り返すことによって、子ども達の科学する心は育まれるのではないかと考える。アクティブラーニングをもとに、自分たちが主体となって参加し、課題を解決する力を身につけてほしいと思う。

今年度のテーマは「風」である。毎日朝の会で“How's the weather?”と尋ねると、子ども達は“It's sunny.”“It's rainy.”と元気に答えている。でもなかなか“windy”という単語は出てこない。ほぼ毎日吹いている風を子ども達はどのように感じているのだろうか。強い風には気付けても、弱い風には興味を持っていないのかもしれない。また、全く風が吹いていない日は、そのことにすら気づいていないのかもしれない。そんなことを考えていたある日、園外保育でタンポポの綿毛を見つけた。息を吹きかけて飛ばしたところ、空に向かって飛んでいく綿毛もあれば、自分の顔に向かって飛んでくる綿毛もあった。何とか上手く飛ばそうと試行錯誤している子ども達の姿から、目に見えない風を感じ、その強さや向きを意識することで、科学する心を育んでいけるのではないかと考えた。



3. 実践報告

事例1 「風はどっちから吹いてる？」

1-1 「タンポポの綿毛が…」 5月8日(金)

5月の晴れた日、子ども達は、歩いて15分ほどの広場へ散歩に出かけた。自由に草むらの中に入り、虫を探したり、草を触ったりしていると、「あっ、タンポポだ」と子ども達が走り出した。草むらの奥には黄色の花だけではなく、白い綿毛を付けたタンポポがたくさん咲いていた。嬉しそうにタンポポを摘んで綿毛を飛ばそうとするが…

子：「わぁ～、すご～い！タンポポたくさん咲いてる！」

「一緒に飛ばそうよ。せ～の、ふう～～…」

行動

それぞれタンポポを1本ずつ持ち、綿毛に息を吹きかける

子：「やった～！飛んでいった！」

気づき・疑問

M：「あれ？上手く飛ばない…」

前方にではなく、自分の顔に向かって綿毛が飛んでくる子ども達が数名

何度か試すが、やっぱり上手くいかない

試してみる

保：「どっち向きにすればいいのかな」

Mさんは頭を左右に振って風向きを確かめたり、

体の向きを変えたりしている

考える

M：「こっちかな…」

もう一度綿毛に息を吹きかけると、きれいに飛ばすことに成功

それを見ていた他の子ども達も真似をし、空にたくさんの綿毛が舞った

成功体験
喜び

保育者の援助

「子どもの気づき」を
支える



【振り返りと考察】

タンポポの綿毛を飛ばすという遊びの中で、自分がイメージしたように綿毛が飛んでいかないことに気付いたが、初めはどうして上手くいかないのかわからなかった。そこで保育者が「どっち向き」という一言を投げかけると、そこから「風には向きがあったんだ」ということを改めて知り、Mさんを中心に風向きを探り始めた。保育者が風向きを教えるのではなく、子どもの気づきを引き出すきっかけとなる言葉を伝えることで、自分で考え、試してみる姿が見られた。しかし、この頃の子ども達は、目に見えない風を体で「感じ」ながら風向きを探っていたので、不確定な部分も多く、一人ひとり違った方向を示すことも多かった。

1 - 2 「鯉のぼりの影ふみ」 5月11日(月) 5月18日(月)

この日は強い風が吹いていた。園庭に遊びに行くと、鯉のぼりが強風にあおられ、様々な方向に勢いよく泳いでいた。「わあ〜い」と走り出した子ども達は…

子：「こっちだ！」

「あっ、今度はそっちに行った」

子ども達は鯉のぼりの下で楽しそうに走り回っている

保：「何をしているの？」

子：「鯉のぼりの影を踏んでるの」「どんどん動いておもしろいの」

子ども達は大きな笑い声をあげながら、鯉のぼりの影を追いかけて遊んでいた

保育者の援助

「子どもの好奇心」を支える

発見

翌週また園庭に遊びに行った。先日と同じように鯉のぼりの影を見つけたが、この日の風は弱く、鯉のぼりはほとんど泳いでいなかった。

保：「今日も鯉のぼり、泳いでいるかな」

子：「(影が)動いていないよ」

保：「この前と違うね」

子：「うん」

保：「何でだろう」

子：「風が違うんだよ」

この日影ふみ遊びはできなかった

気づき

保育者の援助

「子どもの気づき」を支える



【振り返りと考察】

最初に鯉のぼりの影を追いかけて遊んでいた時には、どうして影がどんどん動いていくのかを気にすることはなく、ただその動きを楽しんでいた子ども達であったが、違う日の鯉のぼりの影を見て、何かが違うことを感じていた。子どもの気づきを引き出す「何でだろう」という保育者の問いかけに、すぐ風のせいだと答えた子ども達。影＝太陽と大人は捉えがちであるが、子ども達は太陽が出ているかどうかではなく、風の強さと向きによって影の動きが変わったと気づいていた。また、鯉のぼりの影を通じて、目に見えない風の姿を視覚で捉えることができた一場面であった。

1-3 「風はどっちから吹いてる？」 5月29日(金)

タンポポの綿毛を飛ばして遊んだ広場へ散歩に出かけた。先日来た時よりもタンポポの数は減っており、綿毛飛ばしの遊びはほとんどできなかったが、この日も心地いい風が吹いていた。

保：「今日の風はどっちから吹いているかな」

M：「待ってて」

日向から日陰に移動する Mさんと Sさん

S：「こっちからこう」と全身を使って風の向きを表す

保：「どうしてわかるの？」

S：「日陰に入ると冷たく感じるから」

でも本当の風向きは違っていた

保：「他にどうやったらわかるかな」

M：「こうすればいいんじゃない？」

子ども達は葉っぱを一枚持って風に当ててみる

でもその葉は硬くて風になびかなかった

S：「今日はわからないな…」

工夫

試す

失敗体験



全身を使って風の向きを表す子ども達

保育者の援助

「子どもの発想」を支える

【振り返りと考察】

日陰に移動する行動から、目には見えない風を感じようとする子ども達なりの工夫が見られた。後日保育者が園庭で同じように風向きを尋ねると、「今日は日陰がないからわからない」という答えが返ってきた。日陰ではより風を感じられるというのは、大人にはない発想であった。初めは体で感じようとしていたが、はっきりしないことがわかると、今度は『もの』を使って風向きを調べようとしていた。この時はうまくいかず、保育者の「葉っぱが硬かったからじゃ？」という声掛けにもあまり興味を示すことなく、原因を考えるには至らなかったが、見えないものを見えるようにするという考えが子ども達からかすかに生まれたと思われる。

1 - 4 「調べてみようよ！」 6月15日(月)

この日はかなりの強風が吹き、窓から入った風に保育室の中のものが飛ばされていた。その様子から、保育者が先日のタンポポの綿毛の話 시작했다。

保：「どうして綿毛は顔にぶつかったのかな？」

自分の考え

子：「風が強かったから」「向きが違ったから」

保：「そうだね。風の向きっていつも同じかな？」

子：「ちがうよ」「こっちからも、こっちからも吹くよ」

「調べてみようよ」

保：「どうやって調べようか」

子：「タンポポの綿毛を飛ばす？」「でもタンポポまだあるかな…」

「紙を小さく切って、手の平に載せてみたら」

「風車を作ればわかるんじゃない？」「でも速く回るとどっちからかわかんないよ」

「シャボン玉飛ばしてみる？」

保育者の援助

「子どものひらめき」を支える

友だちの意見に対する
自分の考え

【振り返りと考察】

実際にタンポポの綿毛を飛ばした経験から、風の向きについて自分たちの考えを話し始めた子ども達。保育室がいつものワイワイと楽しい雰囲気から、「みんなで考えてみよう」という空気に変わった。保育者はもっと風に対する興味が深められればと思い、疑問を投げかける形で子ども達の様々な意見を引き出し、受け止めていった。すると自然に「調べてみようよ」の声が上がり、そこからどんどん子ども達の意見が出てきた。その意見に対し「いいね」と共感する子どももいれば、「それでわかるかな」と疑問に思う子もいるなど、友だちの考えに対して自分はどう思うのかを口にする姿も見られた。風車を作るということについては、先日園の畑で、鳥除けのために用務員さんが設置した、ペットボトルで作られた風車を見ていたのでイメージがわきやすかったようだった。最初は勢いよく回っていた風車がしばらくして止まってしまうと、「風が強くなかったからだね」と話していた。この時は「ただ風が強く吹けば風車は回る」と信じていた子ども達であった。

1-5 「あれ？回らない…」 7月3日(金)

先日の話し合いで出てきた風車をみんなで作ることにした。材料は紙コップ・棒・ストロー・セロテープ(絵や色は自由に)とし、子ども達には基本的な作り方(①コップをハサミで切って羽を作る②羽を折り曲げる③羽をひねる)だけを伝えた。「なんかわくわくする～」と話しながら、子ども達は自由に作り始めた。



できあがった風車は様々な形をしていた。羽が長いものや短いもの、羽の幅が広いものや狭いもの、羽をひねってあるものと切りっぱなしのままのもの。様々な風車を持った子ども達は、まず保育室や2Fのテラスで回し始めた。

思いきり息を吸って風車に吹きかける子ども達
すぐに回り始める子もいれば、上手く回らない子も
子:「あれ？どっちから吹くんだっけ？」

子:「ここ吹いたら回ったよ」

子ども同士で話し合う声が聞こえてきた

友だちに吹く場所を教え、一緒に試してみると

子:「すご〜い！回った！」

歓声があがった

そんな中、どんなに息を吹きかけても全く回らない子も出てくる

子:「あれ、全然回らない…」

子:「私の空気(息)が足りなかった！もっと強く吹いてみる。あれ？でもやっぱり…」

風車が回らず困った子ども達は、勢いよく回っている友だちを探して聞く

R:「どうしたら回るの？」

自分の体験を
他児に伝える

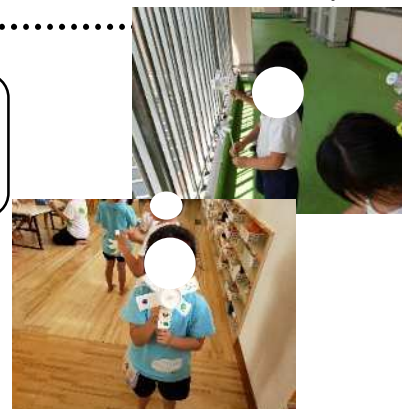
成功体験
達成感

失敗体験

試行錯誤

自分の成功体験を伝える

保育者の援助
「失敗体験」を支える



A：「(羽を)ねじるんだよ」

R：「そうなんだ」と自分の羽をひねってみるが、うまくいかない

Rさんは、羽をいろいろな角度にひねっては息を吹きかける、を繰り返していた

失敗体験

子：「あっ！〇〇くんのが回るのは、(羽の)幅が違うからだ！」

比較・発見

友だちと自分の風車を見比べ、もう一度ハサミを入れてみる
やはり回らない

子：「何で回らないのかな」

子：「ここがぶつかってるからじゃない？」

自分の失敗体験を伝える

友だちの言葉から、羽の切り込みが浅くて、軸にぶつかっていたことに気付く

子：「これで回らなかったんだ」と羽の切り込みを変えて再挑戦

子：「あっ、回った！」

意欲・期待

子：「早く風のある場所へ行こうよ」

息を吹きかけるだけではなく、持って走っても回ることを知っている子ども達から声があがった
全員で園庭に行き、思い思いに風車を回し始めた

子：「さっきは(テラスで)回らなかったけど、走ったら回ったよ」

方法を変えることで成功

園庭を思い切り駆け回り、回り始めた風車に喜ぶ子ども達が増えた

園庭を全速力で直線に走る子もいれば、円を描くように走る子もいた

また、平らな場所ではなく、坂道を上ったり下ったりしながら確かめる姿も見られた

子：「降りる方が(回るのが)速かった！」

試行錯誤・成功体験

子：「(立ったままでも)回ってる！」

保：「本当だね。よく回ってるね。じゃあ、風はどちらから吹いてる？」

子：「あっち！」

子：「ちがうよ。こっちからだよ」

風向きと風車の関係に気付いている子と気付いていない子が見られた



子ども達は、園庭の中を歩いたり、思いきり走ったり、場所を変えたりしながら、どうやったら風車が一番回るのかを探していた。「やった！回った！楽し〜い！」と大喜びする子もいる中、どんなに頑張っても上手く回らず、「どうして？」と困り果てている子も見られた。保育室に戻り、みんなで活動を振り返ってみた。

保：「どうしてだろう」と子ども達に考える時間を与えた

子：「折って(ひねって)いないからじゃない？」

自分の成功体験を伝える

ひねりのある羽とない羽の風車に扇風機の風を当てて確認してみる

子：「ほんとだ。ねじって(ひねって)ある方がよく回ってる！」

気づき・発見

子：「でも僕のはねじってあるけど回らなかったよ」

疑問

子：「折りすぎじゃない？」

自分の考えを伝える

保育者の援助

「子どもの考え」を支える

ひねってはあがるが、向きが揃っているものと揃っていないものをまた扇風機の風に当ててみると回り方に明らかな差が見られた

子：「全部ねじればいいんだよ」

自分の成功体験を伝える

子：「そっか…」

子：「あと、羽が長い方がよく回ったよ」

保：「じゃあ、比べてみようか」

羽の長いものと短いものを扇風機の前へ

子：「ほんとだ！切るところを長くすればいいんだね」

気づき・発見



羽が小さすぎて
回らなかったもの



この日一番よく回ったもの
羽の幅もあり、一定方向にひねられている



羽は長い、ひねり方がバラバラ
で回らなかったもの

【振り返りと考察】

以前畑で風車を見た際、「風が強く吹けば風車は回る」と考えていた子ども達であったが、強い風が吹いていても回らないことがあると気づいた。その理由を伝えるのではなく、「どうしてだろう」と保育者が問いかけることで、子ども達の考えが次から次へと浮かんできた。それは誰かに教わったのではなく、子ども達自身が試行錯誤を繰り返し、そこで得た成功体験・失敗体験の中から学んだことであった。この日一番よく回る風車を作ったAくんと、負けず嫌いのRさん。2人は普段一緒に遊ぶことはほとんどないのだが、この時はお互いに自分の風車を見せ合い、どこが違うのかを考え、話し合っていた。「もっとよく回るようにしたい」という気持ちが一致したからであり、そのことが2人を近づけたのだと思う。また、その場で扇風機を使って子ども達の考えの立証をすることで、「そっか、こうすればよかったんだ」という新たな方法をすぐに学ぶことができた。その日の給食後もおやつ後も、さらに翌日も、風に風車を当てて楽しんでいった。今度は子ども達自身による立証と考えられる。そこでは、羽を少しいじったり、軸になる棒を反対に差したりと、工夫して遊ぶ姿が見られた。また扇風機の風を直に当てること、風を正面から受けた方がよく回るということにも気づき始めていた。自分自身の体験と、友だちの考えを合わせることで、よりよく回るにはどうしたらいいのかを試していることがわかった。全員が敢えて同じ材料を使い、同じ工程で風車を作ったことで、工夫したり、友だちとの違いに気づいたりできるということがわかった。

自由遊びの時間になると風車を取り出して回していた子ども達から、「もう一個作りたい!」という声が上がった。その思いを受け、もう一度作ることに。「前回上手く回らなかったのはどうしてだったかな」と振り返ると、「ねじってなかったから」「折ってなかったから」「短かったから」と失敗した理由も覚えていた。子ども達の反省を活かすため、材料と工程は全く変えずに2個目の風車作りが始まった。

左が1回目、右が2回目に作った風車



左が1回目、右が2回目に作った風車



同じ子が作ったものだが、1回目と2回目では、羽のひねり方が変わっていた



できあがった風車に
扇風機の風を当てて
回るかどうか確認
左後ろの男児は、回
した後羽の調整をし
ていた



走らなくても
回ってるよ



やった!
今度は回ってる



この前のよりも
よく回る〜♪

子：「やった～！回るよ」

子：「うまくできた！」

喜びの声が聞こえてくる中

A：「あれ？回らなくなった」

疑問

前回誰よりもよく回る風車を作ったAくんの声だった

保：「本当だね。どうしてだろうね」

比較・試行錯誤

A：「う～ん、わかんない…」と羽をいじったり、友だちのものと比べたりする

実際羽はひねってあるものの、ひねりが下向きになっており、風を上手く受けられていなかった
でも、しばらくすると…

A：「あっ、回った！」

成功体験・達成感

よく見ると羽が上向きに変わっていた

保育者の援助

「失敗体験からの試行
錯誤」を支える

【振り返りと考察】

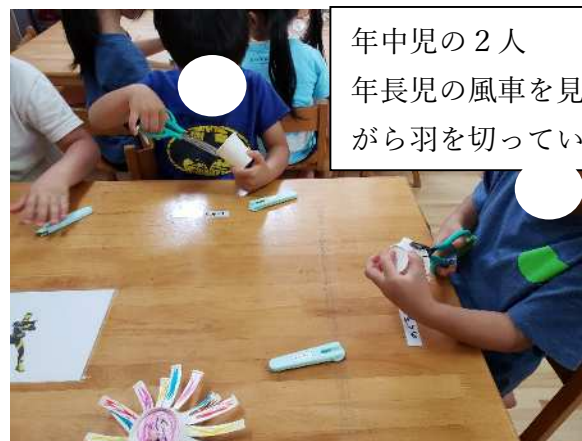
2回目の風車作りでも様々な姿が見られた。羽の大きさに関しては、前回の反省を活かして羽を長く切る子、切ることに夢中になりすぎて細すぎる羽になった子がいた。羽のひねりについては、これも前回の反省から、同じ向きにひねっている子が増えていた。反対向きやバラバラにひねっていた子ども達も、上手く回らないことに気付くと、自分で調整しながら、上手く回る角度を探していた。作る⇒試す⇒調整する⇒もう一度試すのサイクルを繰り返すことで、よりよく回る風車を作り上げていた。1回目に作った時には、特に女の子は色塗りに夢中で、カラフルなものが多かったが、今回はよりシンプルなものが目立った。色を塗るよりも、「早く回して遊びたい」「よく回るにはどうしたらいいのか」「羽はどうやって作ろうか」という子ども達の気持ちがそうさせたように思う。前回は成功していた子ども達の中には、今回よく回らず悩んでいる姿も見られた。Aくんもその一人であったが、そこで諦めてしまうのではなく、じゃあどうしたらいいのかと試行錯誤し、その答えを自分で見つけて解決する様子が見られた。また、できあがりを確認するために扇風機に当てることで、風向きと風車の関係に気づき、園庭で回した際にも、「風はどちらから吹いてる？」の問いに、「こっちから！」とほとんどの子ども達が正しい方向を指し示すようになっていた。

1-7 「私もやりたい！」 8月8日(土)

この日は異年齢保育の日であった。保育室の冷気を循環させるため、扇風機を何台か回していると、年長児が先日作った風車を持ってきて回し始めた。それを見た年少・年中の子ども達が「何してるの？」と声を掛けてきた。勢いよく回る風車を見ると、「私もやりたい！」「私にも作って！」という声が上がった。そこで年長児に「竹組(年長)さん、花組(年少)さんと星組(年中)さんにも教えてあげようか」と声を掛けると、「いいよ！」と嬉しそうな返事が聞こえ、「何が要る？」「ハサミ使ったよね」「紙コップはどこ？」と必要な材料や道具をそろえ始めた。



左が年少児、右が年長児
羽を切ってあげた後、マーカーペンを
貸していた



年中児の2人
年長児の風車を見なが
ら羽を切っていた

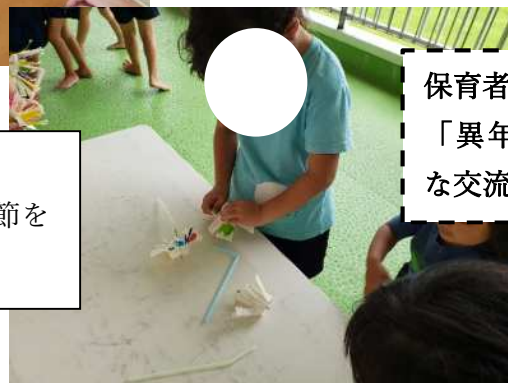


左が年長児、
右が年少児
羽をしっかり
ひねっている



回った、回った～！

左が年長児、右が年少児
遊んでいる途中で羽の調節を
してあげていた



保育者の援助
「異年齢児との自主的
な交流」を支える

【振り返りと考察】

自分達の風車に興味を持った年少・年中児に、子ども達はとても嬉しそうな表情を見せていた。隣に座ると早速作り始めたが、ここでどうやって教えてあげたらいいんだろうという疑問が浮かび上がってきた。「自分達は作り方を知っている、でもそれをみんなにどう伝えたらいいのか」と子ども達なりに考えているようだった。言葉で伝えることは難しいと思った子ども達は、作ってあげることにしたが、ハサミを使える年中の子ども達には見本を見ながら自分で切ってもらったり、マーカーペンを持っていない年少児には自分のものを貸してあげたりと、相手に応じて関わり方を変えている様子も見られた。出来上がった風車の中には、もちろんよく回らないものもあったが、Sさんは自分の経験を活かし、「回らないよ～」という声を聞くと、「こうするんだよ」と羽の調整をしてあげていた。Sさんが直した風車は全てよく回るようになり、子ども達も「やった～！」と喜んでいた。誰かに何かを教えることは簡単ではないが、自分達の経験をどう伝えるのかを考えることで、より深い理解に繋がったと思う。年中のHくんは、以前園庭で風車遊びをしている時から、「何しているの?」「僕にもやらせて」と興味を持っていた。実際に自分で作り、あまり回らないことがわかると、もっと切り込みを深く入れるなど、年長児と同じように工夫する姿が見られた。どの年齢でも、「より楽しむにはどうしたらいいのか(探求心)」を持って遊んでいることを改めて感じた。

事例2 「風をつかまえた！」

2-1 「風をつかまえた！」 8月12日(水)

風車遊びを楽しんできた年長の子ども達に、「今度はどんな風の遊びがしたい?」と尋ねてみた。「紙飛行機!」という声が多い中、Nさんは「こうやって紐を吊るして…フワッと落ちてくるもので…」と話し始めた。周りの友だちも興味津々で静かに耳を傾けている。保育者が「気球かな?」と聞くと、「違うの。落ちてくるの」と身振り手振りで一生懸命に伝えようとしていた。「わかった!パラシュートだ!」と保育者が言い当てると、「そう、そう!」とNさんも嬉しそう。子ども達も「なるほど!」「いいね、おもしろそう!」と賛成し、みんなでパラシュートを作ることにした。前回の風車同様、今回も傘の形や紐の長さ、飛ばし方によってパラシュートの動きにどんな違いがあるのかに気づけるよう、みんなで同じものを作った。

【作り方】

- ① ビニール袋の口を折ってセロハンテープで留める
- ② 袋の四隅にタコ糸を付ける
- ③ 4本の糸をまとめて結び、広告紙で作った重りを糸の先端に付ける



できあがったものを持って早速園庭へ

子：「いくよ～。せ～の、それ！」と空へ向かって投げる

子：「やった。飛んだよ」

子：「おもしろ～い」「クラゲみたいだね」

風車の時よりも成功率が高く、子ども達に笑顔が溢れた

真っ赤な顔をして走ってきたSさん

気づき・発見

S：「走って膨らませてから放すと飛ぶよ。見てて！」

全速力で走り、ビニール袋の傘の部分に風を溜め、パッと手を放す

するとパラシュートは風に乗る、ふわっと浮かんた

子：「本当だ。すごい！僕もやってみよう！」

その姿を見た他の子ども達も真似をしていた

子：「何か、凼みたいだね」

模倣



保育者の援助

「子どもの発見」「実体験からの行動」を支える



子：「ここから飛ばしてみようか」「そうだね。やってみよう」

予想

子：「僕はこっちからにする」

今度は総合遊具や土管型トンネルに上り、そこからパラシュートを飛ばしてみる子ども達



初めはいろいろな方向にパラシュートを投げていた子ども達であったが…

パラシュート作りを提案した N さんの投げたパラシュートが目指していた方向に飛んでいかず、すぐ横にいた保育者の腕にペタッとくっついてしまった

N：「風があっちからこっち(保育者側)に吹いてるからだ！」

気づき・発見

パラシュート遊びにも風向きが関係していることに気づいた
周りの子ども達も気づき始め、風上から風下へ向かって
飛ばす姿が増えていった

H：「宇宙から落としたらもっと飛ぶかもね」

想像

夢を膨らませる子も見られた



いろいろな場所でパラシュートを飛ばして楽しんだ後、保育室でまた活動を振り返った。

保：「どうだった？」

子：「おもしろかった！」と多くの声が聞こえてきた

保：「どうやって飛ばしたのかな？」

成功体験

S：「(傘に)風が入って、膨らませたら飛んだ」

Y：「下から上にポンッと投げた」

T：「(凼みたいに)走ってパーンと手を放したら飛んだよ」

様々な答えが出てくる中、「はい！」と手を挙げた K くん

K：「風をつかまえた！」

新しい表現の誕生

その言葉に保育者も子ども達も息を飲んだ

保：「風をつかまえられたんだね。どうやってつかまえたの」

H：「袋(傘)で」Kと一緒に遊んでいたHくんだった

保：「袋で風をつかまえられるなんておもしろいね」

子：「おもしろ〜い！」

友だちの考えの補足

その日の午後、サーキュレーターの風を当て、
風を「つかまえて」遊ぶ子ども達



【振り返りと考察】

「今度は風を使ってどんな遊びをしようか」と問いかけると、すぐに答えが返ってきた。紙飛行機も今回作ったパラシュートも、「風が関係している」とすでに気づいていた子ども達。風車遊びを通して感じた風の力を、次の遊びに活かそうとしていることがわかった。初めは特に向きも考えずに飛ばす姿も見られたが、傘の部分が膨らむことやパラシュートが飛んでいく方向を発見すると、風向きを考えて飛ばそうとしていた。そんな中、保育者が最も驚いたのは、「風をつかまえた」というKくんの言葉である。保育者が活動中にその言葉を使ったことは一度もなかった。Kくんは普段虫捕りやカエル探しが大好きで、園で様々な生き物を見つけては捕まえていた。今までは「目に見えるもの」を捕まえていたのだ。しかし今回、パラシュートの傘が膨らむのは、そこで「風をつかまえているからだ」と気づき、「目に見えないものもつかまえらるのだ」ということを友だちに伝えることができた。「科学する心」が生まれた瞬間だった。その日の午後、傘に風を当てながら、「風をつかまえられたよ」とその感覚を楽しむ子ども達の姿があった。

2-2 「風の力ってすごい」 8月26日(水)

「もっと高い所からパラシュート飛ばしてみようよ」という子ども達の声に答え、2Fのテラスから飛ばしてみることにした。「僕は2Fから投げるよ」「じゃあ私は下で受け止める」と自分たちで役割分担をし、それぞれ分かれて遊び始めた。

子：「いくよ〜。いち、にの、さん！」

2Fの柵の隙間から手を出してパラシュートを投げる子ども達

保育者の援助

「子どもの信じる力」を支える

でも投げ方が様々でうまく飛んでいかないものも…

失敗体験・疑問

子：「あれ？落ちていった…」

保：「どこを持って投げたら飛んでいくんだろうね」

子：「ここだ！」

気づき

思い出したように傘の真ん中を掴んでパッと手を放す

子：「飛んだ〜！」

成功体験・達成感

子：「来た来た〜！」

上を見上げて待っていた子ども達は飛んできたパラシュートを走って追いかけた

子：「キャッチした！」「もう一回しよう」

受け取ったパラシュートを2Fまで運び、繰り返し楽しんでいた

そんな中…

驚き

Y：「あっ、僕のパラシュート、ひっかかった」

2Fから飛ばしていたYくんのパラシュートが軒先に引っかかり

Yくんが下へ降りてきた

子：「本当だ。どうする？」

困惑

自分の考え

子：「ブロックで棒を作って、それで取ろうか」

子ども達から心配の声と、解決する方法が聞こえてくる

でもYくんは落ち着いた表情で

Y：「風が吹けば落ちてくるよ」

体験からの自信
信じる心

その言葉を聞いた子ども達は、見上げながらじっと

待っていた

しばらくすると、Yくんのパラシュートはふわっと

浮き上がって無事に降りてきた

子：「よかったね」

保：「どうして落ちてきたんだろうね」

S：「強い風が吹いたからだよ」

体験からの気づき



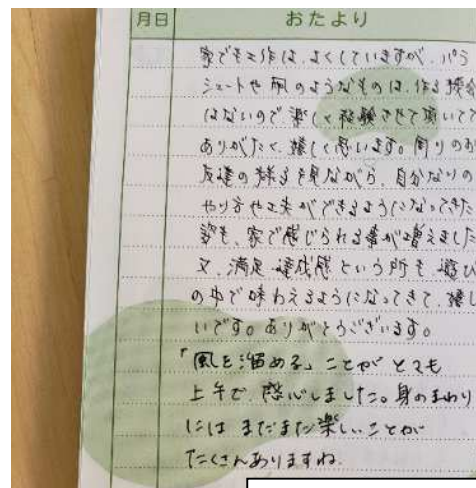
引っかかってしまった
Yくんのパラシュート



Yくんのパラシュートを
見事キャッチ

後日、連絡帳で子ども達の遊びの様子を家庭に伝えたところ
パラシュートが引っかかってしまったYくんの保護者から
【お迎えに行った時、「この棚に引っかかって…」と一から
十まで話してくれました(笑)】というコメントが寄せられた

また、Sさんの保護者からも次のようなコメント(抜粋)があった
【友達の様子を見ながら、自分なりのやり方や工夫が出来る
ようになってきた…】
【満足・達成感という所も、遊びの中で味わえるようになって
きて…】



Sさんの連絡帳

子ども達が楽しんでいた風の遊びに保護者も関心を示し、その中で発見した
自分の子どもの姿を伝えてくださった。この遊びを通して、保護者と園とで子どもの成長を
共有することができた。

【振り返りと考察】

子ども達は、「高い場所から飛ばしたらもっと飛んでいくかも」と考え、前回遊んだ遊具よりも高い2F テラスを選んで遊び始めた。予想通りパラシュートはより風を受けて遠くまで飛んでいた。初めは適当に投げていた子ども達も、保育者の「どこを持ったら…」の声掛けに、風を溜める働きをする傘のことを思い出し、そこが広がるよう工夫して投げるようになった。そんな時、Yくんのパラシュートが引っかかってしまった。それを見た子ども達は慌ててどうしたらいいのか話し出し、保育者自身も何を使って取ろうかと道具のことを考え始めた。しかし、いつもであれば「どうしよう」と不安になり、涙を見せるYくんが、この時ばかりはとても落ち着いていた。「風が吹けば落ちてくるよ」という言葉と余裕のある表情に保育者も驚いた。Yくんは風の力を信じていたのだ。そしてその言葉通りパラシュートが無事に戻ってくると、「ほらね」と笑顔を見せ、友だちも「本当だ!」と感心していた。今までの風に関する遊びから得た経験がこの予測と結果を生み、また一つ科学する心が育ったと感じた。

4. 総合考察

タンポポの綿毛飛ばし、鯉のぼりの影踏み遊びから始まった今回の「風」についての活動を通して、子ども達の探求心の深さと発想の豊かさ、そして失敗しても諦めず、そこから学んでいく力を感じることができた。初めは何となく風を感じているが、風車遊びやパラシュート遊びの中で、風を意識し、どうやってそれを活かしていこうかと考える姿が多く見られた。当初風向きを聞かれて、「こっち？」と適当に答えていた子ども達も、遊びを繰り返すことで、今では正確に答えることができるようになった。

また、自分達の身の回りには見えるものだけではなく、「見えないもの」もあることを知り、それを意識することで「見えないもの」をとらえる感覚を育てることができたと思う。「風をつかまえた」というKくんの発想は、まさにこのことを証明しているのではないか。日々の生活の中でも、見えない風への関心は高まっている。園庭にいた雲が横に動いているのを見て、「風が吹いてるからだね」「台風だともっと風が強いから、ビューンっていくんだよね」と友だち同士で会話したり、突然降り出した雨がすぐに止むと、「雲が(風で)動いたからだね」と話したりしていた。科学する心が確実に育っているように思う。実際に今大きな台風がやってきたら、風を意識し始めた子ども達はどうか、どんな発見をするのか、とても興味深く楽しみである。

確かに、失敗したり上手くできなかつたりすると、悔しい気持ちになり、つまらないと投げ出してしまうことも多い。しかし、失敗から気づくことも多い。「もっと楽しむためにはどうしたらいいのか」という探求心を持ち、試行錯誤を繰り返していくことで、より遊びは深まり、上手くいくと「おもしろかった」「もっとしてみたい」という意欲も生まれ、科学する心も育まれていくのではないかと考える。

5. 考察に基づく課題と今後の方向性と計画

今回の「風」についての遊びや実践研究は、基本的にアクティブラーニングの形で進めていった。保育者が課題を与え、それについて教えたり指示を出したりするのではなく、子ども達が主体となって遊んだり考えたりできるよう、保育者は「支える」ことに重点を置いて活動をしていった。様々な場面において、「どうしてだろう」「どう思う？」などと質問を投げかけていくと、子ども達からは、ある程度予測された答えだけではなく、意外な発想やひらめきも返ってきた。その考えを子ども同士で共有していくことで、更に考えを深めたり、意欲的に遊びを発展させたりすることができる。子ども達は考える力をきちんと持っている。保育者は教えすぎず、子ども達の体験によって学ぼうとする力を信じて寄り添う。彼らの持つ考える力を最大限に引き出すために、保育者は子どもの気づきや発見、ふと漏らした「ひとこと」を見逃さず、そこから子ども達が主体的に動いていけるような「支える」保育を大切にしていかなければならないと思う。それはきっと科学する心に繋がっていくだろう。

研究代表・執筆者氏名

高橋 真弓・渡邊 結衣